
なのはの初恋

ピロシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはの初恋

【Nコード】

N4614L

【作者名】

ピロシキ

【あらすじ】

なのはの初恋を描きます。

別々の場所で

始まりは小さなきっかけでした。

小さな種はやがて大きな花になっていった……

想いを繋ぐ物語り……… 始まります。

第1話

……… チャンチャン チャラチャンチャンチャン
とある部屋に音楽がなり響く。

「んー？」

すると、もぞもぞとベッドの上で動き出す気配が。
しかし、なかなか音楽はなりやまない。

ズルツ、ガチャン。
いまだうごめく不思議ベッドの中から携帯電話がずり落ち、更に大きな音が部屋に響きだす。

さっさと布団から出ればいいのだろうが侮るなかれ、季節は真冬、
暖かな布団から出るにはかなりの決心が必要なのだ。

ぬーっと、布団から腕だけが伸びて出て携帯を掴み、ようやく音楽が止む。

「んー、もう朝ー絵文字」

ノツソリと布団が捲れて女の子が現れる。

「ユーノ君、朝だよ……って、もうユーノ君は帰ったんだっけ。」

眠い目をコスリコスリ、女の子は制服に着替え始める。

「なのはー？朝ご飯できたわよー？」

「わわっ、はーい！今いきまーす！。やっばーい、急がなきゃ！」

バタバタと階段を駆け降り、ひとまず洗面所へ。

髪を左右に小さくまとめ……よし

つとと、レイジングハートを忘れる所だった。

ネックレスをつけて………今度こそよし

急いでリビングに行かなきゃ。

「おはよー、なのは。お兄ちゃん達はもう学校に行ったわよ？」

「お母さん、おはよー。」

この人は私のお母さん。

すっごくキレイで、優しい自慢のお母さんなんだ

「えーっお兄ちゃん達もう行っちゃったのー？」

「今日は朝練の後まっすぐ学校に行くんだって。ほらほら、早く食

べないとバスに遅れるわよ?」

そうなのです、実はお兄ちゃん達は………ナントカっ
てい流派の剣の使い手で、いつも稽古をかかさないんだよ。

しかもありえないことに、銃弾もかわせるとかかわせないとか。
私は運動神経がないから本当に凄いなーって思う。

って、

「わわっ、もうこんな時間!?!」

今はそれどころじゃないや。

私は急いで朝ご飯を食べて………うん、今日もおいしい

「よし、それじゃあいつてきまーす!」

「はい、行ってらっしゃい。」

お母さんの見送りを受けながら、バス停まで走ります。

………走るんだけど……。

「うわーん、私の足じゃ間に合わないよー!?!レイジングハート、
どうー!?!」

すると、私の胸元のネックレスについた、赤い宝石がキラリと輝き

………

「このままだと間違いなく遅刻です、マイマスター。」
と答えてくれます。

お兄ちゃん達は銃弾も避けちゃう凄い剣士だけど、実は私も普通の人じゃなかったりします。

ユーノ君っていう魔法使いの男の子が倒れていたのを助けてあげたのがきっかけで、この子……………レイジングハートっていう名前の魔法の杖を手に入れた私は、魔法少女なんかをやっちゃったりしちゃってます

今のレイジングハートは待機状態で、ネックレスになってますけど。

…………でも、魔法少女ってわりには、魔力弾をうったり、砲撃を撃つたりとあまり可愛くはなかったりします。……………グスン。

「やつぱり〜〜!?!?」

私、泣いちゃいそうです。

すると……………

キラんツ!

「アクセルフィン」

足元に薄いピンクの羽が生えて、体が浮きました。

これはアクセルフィンっていうて、空を飛ぶ事ができる唯一魔法少女って響きに似合う魔法だったり。

「レイジングハート!? 駄目だよ、こんな街中で!?!?」

「しかし、今朝は人目ありません。空に浮かばなければ安全だと判断します。それに、遅刻しますよマスター?」

うーっ、そうだけどもー……。

「……………じゃあ、ちょっとだけね。
遅刻はしたくないしね」

「オーライ、マイマスター。」

羽が飛ばたくと一気に加速します。
うん、これなら余裕で間に合うね

所変わって

無限書庫

薄暗い広い空間。

果てが見えない程に広い広い空間。

ここはある種の聖域のような空気を持っている、そんな場所。
そこに彼は囚われていた……………

「……………ブツブツ……………やはりあのロストロギアは古代ベルカの名残か……………」

……………よし、とりあえずの報告書は完成つと。」

と、分厚いレポートをファイリングする青年……………というにはまだまだ幼い少年が一人。

しかし彼、囚われているというわりには、見る限りにおいてそんな様子はみじんもない。

出入口は普通に開いているし、彼は自由に動きまわってせっせと文献を開いている。

囚われているというのは彼の立場の問題であって……………

「だー！クツソ終わるわけじゃないかぁー！？」

彼の周りには既にまとめ終わったレポートと、その4倍は残っている調査依頼が山のように積んである。

ここは無限書庫。

そもそも、世界とは一つではなく、いくつもの次元世界が存在する。この無限書庫はそれらの次元世界の安全を守る時空管理局の中にある。

そして、その次元世界はそれこそ星の数程あるのである。

当然全てを管理できるわけではないので、ある程度の文明が発達した世界に限定して管理しているのだが、この無限書庫はそうではない。

管理局は創設以来、管理局が手にしたどんな些細なデータや、情報でも整理したもの、してないもの、真偽がわからないものから、おとぎ話まで、とりあえず貯蓄しておいたのだ。

そのおかげで、書庫として使われていたこの場所はいつしかデータのはきだめになり、ありとあらゆるデータがあるはずだが、見つからない、実質使い物にならない空間となり、無限書庫と呼ばれるようになったのだ。

しかし、この少年……ユーノ・スクライアが管理局に来てからそんな状況は一変した。

なのはが助けた魔法使いというのがこのユーノなのだが、ユーノは、とある解決は不可能と言われた事件を本来ならどうしようもなくなつて、最後の最後の手段として、チームを組んで年単位で調査をするような無限書庫にて、たった一人で、しかもほんの一ヶ月足らずで調査しきり、事件を解決に導いたのだ。

スクライア一族はもともと遺跡調査などを生業にしている一族で、調査に関してはまだ幼い少年であるはずユーノは管理局の誰よりも優れていた。

彼は事件解決後、管理局にスカウトされて、管理局、無限書庫の司書として働きだしたのだが………

「こんな量終わるわけないじゃん!？」

無限書庫が使えるとなると、管理局一のデータベースである。ユーノに調査依頼が殺到するのは当然である。

そんなわけで、彼はここ数ヶ月をほとんど無限書庫内で過ごしており、そろそろストレスがピークに達しかけている。

「ちえっ、クロノのやつちゃんと休暇申請出してくれてんのかな？」

休暇がもらえない事を自分を無限書庫の司書に誘った友人のせいにしてみたりしてみる。

「ふむ、君はそんなに僕を信用してないのかな？」

ユーノはびっくりして振り返るとそこにはたった今愚痴った相手が立っていた。

「クロノ！なんだよ、まさかまた調査依頼かい？正直一人じゃこれ以上は無理だよ？」

「違うから安心しろ、フェレットもどき。」
と、手にした書類を差し出すクロノ。

「誰がフェレットか、誰が！？」
書類を受け取りながら文句をかえす。

イライラと書類に目を落とすユーノ。

「あ……、なのはから……。」

ソレは書類ではなくユーノ宛に書かれた手紙だった。

差出人がわかると先ほどまでの不機嫌が嘘のように消え、とても優しい笑顔になるユーノ。

それを見ていたクロノはやれやれと首を振りながら苦笑いをしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4614/>

なのはの初恋

2010年10月10日04時48分発行